

博士学位論文審査報告書

大学名	早稲田大学
研究科名	スポーツ科学研究科
申請者氏名	山下 玲
学位の種類	博士（スポーツ科学）
論文題目	観戦者の知覚する構造的制約要因が観戦行動へ及ぼす影響：チームへの愛着と価値との関係性の検証 Perceived Structural Constraints Affecting Spectators' Behavior: Testing the Relationship between Team's Attachment and Perceived Value
論文審査員	主査 早稲田大学教授 原田 宗彦 博士 (Ph. D.) (ペンシルバニア州立大学) 副査 早稲田大学教授 武藤 泰明 博士 (スポーツ科学) (早稲田大学) 副査 早稲田大学教授 松岡 宏高 博士 (Ph. D.) (オハイオ州立大学) 副査 龍谷大学講師 大西 孝之 博士 (スポーツ科学) (早稲田大学)

本学位申請論文は、プロスポーツチームのマーケティングにおいて、観戦者の知覚している構造的制約要因を明らかにするとともに、観戦行動を促進する要因が、構造的制約要因を緩和させる働きを持っているか否かを検証することを目的とするものである。日本において、地域に根付いた経営方針をとるプロスポーツリーグが全国に誕生したが、プロスポーツ全体の観客動員数は全体で14.8%減少するなど、ファンを引き付け、定着させるマネジメント力は充分ではない。観客数は、チームにとって大きな収入源である入場料収入に直結するゆえに、一度来場したスポーツ観戦者に再びスタジアムに足を運んでもらう努力をすることは、チーム経営者にとって重要な課題である。さらに経営効率を考えると、一度来場したファンを囲い込み、顧客継続に結びつけることが安定経営を可能にする。そこで本論文では、観戦者の知覚する構造的制約要因がファンの観戦行動へ及ぼす影響を調べるために、以下の3つの研究を行い、新しい知見の蓄積を試みている。

研究 I では、観戦者の知覚している制約要因を明らかにし、性別・年齢・昨シーズン観戦頻度によって、知覚している構造的制約要因がどう異なるかに関する検証を行った。そのために、スタジアムにおいてホーム試合観戦者を対象に質問紙調査を実施し、データを収集した (n=612)。分析には確認的因子分析、t-検定、一元配置分散分析を用いた。その結果、観戦者の知覚している制約要因は代替活動・ハード面・ソフト面・コスト・アクセス・コアプロダクト・天候の7因子26項目で構成されていることが明らかとなり、性差・年齢差は確認されなかった。さらに昨シーズンの観戦頻度を3群に分けて比較した結果、天候因子で群間に差が認められ、観戦頻度が少ないほど、天候を制約要因と知覚しやすい傾向にあることが明らかとなった。

研究Ⅱでは、観戦者の継続的観戦行動に影響するチームへの愛着と価値、そしてふたつの観戦行動促進要因（チームへの愛着と価値）の構成概念妥当性を再検討し、研究Ⅰ同様、性差・年齢差・昨シーズン観戦頻度差によって知覚している促進要因がどのように異なるかについて検証を行った。さらに、再観戦意図および累積的満足度について、どちらの促進要因がより強く影響しているかに関する検証も試みている。データは、質問紙調査を用いて収集し（n=448）、分析には確認的因子分析、t検定、一元配置分散分析、重回帰分析を用いた。その結果、観戦者の知覚している観戦行動促進要因の構成概念妥当性は担保され、男性の方が、チームへの愛着を知覚しやすく、観戦頻度が多くなるにつれて、チームへの愛着が知覚されやすくなる傾向にあることが明らかとなった。年齢差において知覚している観戦行動促進要因に違いはなく、価値はどの平均値比較でも有意差は確認されなかった。さらに重回帰分析を行った結果、再観戦意図にはチームへの愛着が影響し、累積的満足には価値がより強く影響していることが明らかになった。

研究Ⅲでは、研究ⅠおよびⅡで明らかとなった構造的制約要因と促進要因、再観戦意図との関係性を検証した。データは、スタジアムでの質問紙調査によって収集し（n=229）、分析には確認的因子分析、2つの観戦行動促進要因を調整変数とした二要因分散分析を用いた。なお、交互作用の検定を行ったのち、Bonferroni法を用いて、主効果の検定も行った。その結果、チームへの愛着・価値とどの制約要因の各因子においても交互作用は検証されなかったが、すべての因子において、愛着と価値に主効果が確認され、促進要因が直接的に再観戦意図を規定していることが明らかにされた。

なお、本論文の内容に関連する原著論文は下記の通りである。

- Yamashita, R., and Harada, M. (2015) Constraints of sport spectators -The case of J. League Division 2 spectators. *Asian Sport Management Review*, 9, 37-54.

本論文では、第一に、スポーツ観戦者が知覚している構造的制約要因が、階層化されている可能性を示唆した。それらの要因は、並列の関係になく、代替活動やコストといった観戦に必要な時間や金銭を知覚し、次に経験値に基づくその他の構造的制約要因に移行することが明らかにされたことは評価に値する。第二は、Gibson et al. (2002) や Greene and Jones (2005) によって「カジュアル」なレジャーに分類されてきたスポーツ観戦が、コアファンにとっては多くの折衝要因が介在する「シリアス」なレジャーであることが明らかにされるなど、レジャー行動研究に新しい知見を提供した点も評価に値する。

以上のことをふまえ、本論文が博士（スポーツ科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上